

対馬島



島の魅力、 見つけて、活かして、繋ぎたい



川口 幹子 (かわぐち もとこ)

青森県生まれ。北海道大学大学院環境科学院にて博士(環境科学)取得後、日本学術振興会特別研究員、東北大学生態適応グローバルCOE特別研究員を経て、平成23年、島おこし協働隊として対馬へ赴任。地元漁師と結婚し、永住を決めた。旧姓、木村。



島おこし実践塾での農地再生活動。

◆地域の資源は地域の中で循環させる

地域おこし協力隊(対馬では島おこし協働隊)として対馬に移住したのが三年前、平成二三年の六月。それまで私は、大学で働く研究者でした。協働隊募集の書類審査が通り明日が面接日、という時に、あの東日本大震災が起こりました。勤務先の東北大学も震災で大きな被害を受けました。三陸の臨海実験所からデータも研究室もすべて失って命からがら避難してきた友人。家族を失った後輩。お世話になっていたダイビングショップは、店ごと海に沈みました。三月一二日に予定されていた面接は当然できず、後日スカイプ(インターネット電話)での面接を経て無事採用していただくことができましたが、こんな状況で、私だけ東北を離れ、逃げるように対馬に行ってしまったていいのだろうか。後ろ髪をひかれる思いでしたが、同時に、いまこそ実践すべき時だ、対馬に飛び込んでみようという思いを強くしたのも事実です。

東日本大震災を機に、日本全体が、ほ



本土より朝鮮半島に近い国境の島。面積696.48km²、人口3万4407人(平成22年国勢調査)。

んとうの豊かさやほんとうの安全、安心して何だろう？と考え始めたような気がしています。流通網が断たれ、スーパーが長い間開店できない中、地元の農家とつながっていた小さな八百屋さんは早々に店を開け、重要な食糧供給拠点となっていました。電気がなければ水も汲み上げられない高層マンション。その一方で、薪で暖をとり、井戸水も併用していた地方の住宅では、普段と変わらない生活を送ることができていました。地域にある資源を賢く使うすべを持っていくことの重要性。だれが何を持っていくかを知っていて、普段からそれらを交換しあう関係の安心感。通常の生活ではほとんど意識することのないこれらの要素が、浮き彫りになったのです。

私はいま、対馬の中でもさらに田舎の小さな集落に住んでいます。お肉やビールはさすがに買いますが、野菜や魚はほぼ買いません。犬を散歩させながら、畑仕事をしている近所の人と天気の話でもしたならば、手ぶらで帰ることはほとんどないのです。私の夫は漁師ですが、いつも野菜をくれる近所さんには、魚でお返しします。私が漠然と思いついていた理想の社会。それは、地域の資源を地域内で循環させ、モノもカネも地域内でしつかりまわる社会です。対馬では、それがあたりまえに行われていました。

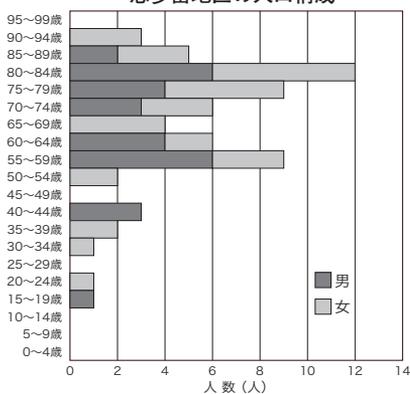
離島である対馬は、ある意味開発から取り残されていた歴史があり、それゆえ、地域資源に依存する暮らしや、そ

のような暮らしの中で醸成されてきた文化や信仰や風習が、未だに残っています。こうした暮らしは、日本中が価値観の転換を迫られたいま、つぎなる世代の「豊かさ」を示すものとして、モデルとなると思いました。

◆地域の課題を学ぶ学生が地域づくりの担い手に

私が現在活動拠点としている上県町志多留地区は、人口約六〇名、高齢化率は六割を超える限界集落です。このあたりは、稲作伝来の地とも伝えられ、古くから人々が営み続けてきた集落ですが、現在は空き家も目立ち、長い間人々や野生生物を育んできた水田や畑も、いまやほとんどが放棄されています。志多留には、若い夫婦がいまないので、

志多留地区の人口構成



自然に人口が増えることはなく、必然的に廃村になる運命です。外から人を呼び込む以外に、集落を存続させ、豊かな里山を後世に残す道はありません。

ではどうやって人を呼び込める



集落内に点在する空き家。



谷間に広がる耕作放棄地。

のだろう。そう考えたときに、この地区は過疎高齢化や耕作放棄、それに伴う里地里山の生物多様性の劣化、空き家問題など、地域課題の教材がたくさんあるな、ということに気づきました。

そこで「学べる集落」をコンセプトに、人を呼び込み、地域のファンづくりを進めることにしました。平成二四年度に始まった「島おこし実践塾」は、今年で三年目を迎えます。過疎再生と里山の生物多様性保全をテーマに、講義と実践活動とグループワークから構成される合宿形式のプログラムですが、毎回全国から三〇名を超える参加者が集まっています。そのほかにも、自然資源を活用する地域の人の暮らしを体験する「島暮らし体験ツアー」、自然再生学会との連携で耕作放棄地の再生技術を学ぶ「田んぼ再生研修」、地区にある築一〇年を超える古民家を活用して自然のしくみ

を取り入れた家づくりを学ぶ「古民家再生塾」など、さまざまな学びのプログラムを実施してきました。これらの講座を通じて、人間の暮らしや営みに裏打ちされた里山環境の保全のあり方や、自然から恵みを引き出す知恵を、島内外の若者に伝えていきたいと思っています。

こうした活動が評価されたのか、平成二五年度は、総務省の「域学連携」地域活力創出モデル実証事業に採択され、本格的に地域と大学が連携して取り組む地域づくりを進める体制が整いました。地域づくりを学びたい学生を長期で受け入れ、地域住民とともに課題解決に向けたプロジェクトに取り組むという、インターン制度を導入しました。昨年度は二三名の中長期インターンを受け入れましたが、中でも特徴的だったのが、四ヶ月もの長いあいだ地域に滞在してくれた学生たちの活躍です。学生の手によって、消滅していた婦人会の活動が再開し、上述したようなイベントの開催時に、地域食材を使った食事提供を行い、参加者からの食費で自分たちの人件費と食材提供者への謝礼を賄うしくみができました。この活動が契機となって、加工品の製造販売ができる施設を地区内に整備しようという動きにつながっています。

外部サポーターを集め、耕作放棄地の再生をはかろうと、田んぼのオーナー制度の導入を手掛けた学生もいます。制度設計や広報ツールの作成、実際のオーナーイベントの企



ホームページで田んぼのオーナーを募集。

びたいという意思をもって集まった学生が、自分の興味関心や得意分野と地区の課題とをみごとにマッチングさせ、地域づくりの強力な担い手として活躍してくれたのです。

◆よそ者だからわかる地域の暮らしの豊かさ

こうして、あつという間に協働隊の任期である三年間が過ぎていきました。総じて楽しい三年間でしたが、いちばん苦労したのは、じつは地元の人々の巻き込みだったような気がします。実践塾参加者へのアンケートでは、じつに六割強の若者が地方での暮らしや仕事を希望しており、自然豊かな地方で、自分らしい仕事やライフスタイルを求める若者は増えています。しかし、肝心の地元の人たちは、自

画と運営まで、提案した学生が中心となって行っています。大学で建築を学んできた学生は、そのスキルを活かして古民家の改修プランを作成し、建築系の学生を対象として古民家の修繕技術と環境に調和する暮らしの在り方を学ぶプログラムの企画を行いました。このように、地域の課題を学

分たたちの暮らしが、皆が憧れるような豊かな暮らしだということ、自分たちの地域が魅力と資源にあふれる場所だということに気づいていません。それゆえに、オーナー制度や加工品づくりといった取り組みをしても、そんなことしてもどうせここでは若者は生活できない、という諦めモードから抜け出せていません。私たちよそ者の役目は、地域の人に、自分たちの地域の魅力を認識させることなのではないかと最近思うようになりました。自分たちの地域にたくさん人がやってくる。地域の産品が都会で売れる。そういう実績を重ねることで、地域の人たちが自分たちの暮らしの豊かさを認識できたとき、それがゴールなんだろうと思います。



島おこし実践塾での地域活性化プラン発表。

そんなことを思って、昨年、協働隊同期の松野由起子デザイナーとともに社団法人を立ち上げました。地域の魅力を見つけて(M)、活かして(I)、繋いでいきたい(T)という思いを込めて、MITと名づけました。任期終了後の自分たちの食い扶持の確保が法人にしたいちばんの目的ですが、地域の資源を活かして産業化することで、地方で

も若者が暮らせるんだということを証明したいのです。

具体的には、これまで協働隊として行ってきた「学びの商品化」という部分で研修プログラムを企画・実施したり、市からの委託を受けて学生受け入れのコーディネート業務を行ったり、私の得意分野である環境保全に関するコンサルティングをしたりして、なんとか食いつないでいます。

松野デザイナーは、商品パッケージや販促ツールなどのデザイン依頼を受けたり、彼女なりの視点で見つけた島の魅力をオリジナルグッズとしてデザイン、商品化して販売するなど、デザイナー

としてのスキルを存分に発揮して仕事を創出しています。

設立二年目の今年は、社員が七名に増え、地域の魅力を活かした着地型観光を推進、住民が持ち寄ったアイデアを商品化するラボ事業、海洋保護区の設定や市の総合計画を作成するお手伝いなどの

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

大陸の灯を肉眼で眺めることのできる対馬で、現在、地域おこし協力隊員5名が活躍している。平成23年度に「島おこし協働隊」として設置し、第1期生5名はこの春卒業。うち4名が島に残り活動を続けている。

隊員の経歴はさまざま。大学や民間企業の研究員、デザイナーなどで、博士号取得者2名、獣医師をも擁するプロフェッショナルな顔ぶれである。隊員たちの大半は着任前にいながらも対馬を訪れたことはなく、職務内容に惹かれて、自分が持てる能力や経験を対馬で発揮できるのではないかと感じたのが応募の動機だった。その職務は、「生物多様性保全」「デザイン」「植物資源を活かした特産品づくり」「有害鳥獣対策」「民間伝承保全」など。それぞれの専門性を活かし、地域住民、行政と連携した活動は、全国の関係者に注目をいただいている。

●隊員の活躍

過疎地域では、担い手の数のみならず、「誇りの空洞化」と呼ばれるような心の過疎が生じている。地域おこしに対して無関心、無責任、無気力さが地域に漂う中で、地域おこし協力隊はまさに理想的な制度だと思った。経済的利便性よりも生活の質を志向する都市住民の移住を促すばかりか、地域おこしに仕事として専念できるからだ。

平成23年度に導入して以降、隊員たちの活躍はすごいもので、地域住民の諦めかけていた心を奮い立たせたり、対馬ファンを増やしたり、行政に大きな刺激を与え横の連携を促したり、数多くの成果を上げている。隊員たちの熱意や行動は、これまでつながりえなかったネットワークを構築し、地域おこしの可能性を広げてくれている。類は志のある友を呼び、国家公務員や民間企業人が途中退職して移り住み、ともにソーシャル・ビジネスに取り組んでいる。お金も情報もアイデアも呼び込み、新たな潮流を創り出しているのだ。

●これからへ向けて

博士号取得者の隊員から、奨学金の返済が重荷になっていることを聞いた。高い志・知識・経験を地域おこしに役立てようにも、奨学金を返済するために都市部にとどまらざるを得ない。そうした人材の志向に応え、質的な人口の還流と補完を促すにも、とりわけ離島においては、奨学金と協力隊制度との連動を検討する必要があるのではないかと。

(長崎県対馬市しまづくり戦略本部新政策推進課
前田 剛)

仕事も手掛けるようになりました。

地域おこし協力隊制度の発足から五年。総務省の調査では、任期終了後、およそ七割の隊員がその地区で仕事をみつけ、あるいは仕事をつくり、定着する選択をしているとのこと。地方で働くことへのニーズは、確実に高まっていると感じます。対馬のような離島は、いかなれば課題先進地域ですが、だからこそ、ここから新たな生き方、暮らし方、産業の在り方を提言できる。それこそが、地域おこし協力隊に求められている役割なのだと思います。